

特集 都市のソーシャル・キャピタル

● 新しい生活者価値を生み出す
ソーシャル・キャピタル

地元学、地域の資産を再発見する

吉本 哲郎

コミュニティビジネスとコミュニティアライアンス

新川 達郎

地域情報ネットワークによる

コミュニティ・ソリューションに向けて

天野 徹

持続可能な社会とソーシャル・キャピタル

福士 正博

ITネットワークと市民社会

山岡 義典

総合型地域スポーツクラブ構想と市民参加型まちづくり

中西 純司

災害に強いコミュニティのために

渥美 公秀

強さと弱さを支える地域の力

浦 光博

のびのび空間、わくわく世界、
次から次の過程を育む「まちの縁側」

延藤 安弘

安全・安心とソーシャル・キャピタル

東 一洋

食を間にはさんだ、新しい関係づくり

結城 登美雄



地元学、 地域の資産を再発見する

吉本 哲郎 *Written by Tetsuro Yoshimoto*

はじめに

「地元学」は地元で学ぶことである。ないものねだりをやめてあるものを探し、地域の持っている力、人の持っている力を引き出し、個性を確認し、あるものを新しく組み合わせ、ものづくり、生活づくり、地域づくりに役立て誇りを取り戻していく。この地元学は、水俣病問題で苦しんだ水俣の取り組みから生まれたもの。やってきたことを振り返って地元学と名づけ、岩手や三重から徐々に全国各地に広がっていった。

「あるもの」や「地域と人の持つ力」とは地域の資産である。水俣において、住民参加と協働で取り組んだ、水俣病問題の解決と共存と水俣の再生、また、どんづまりの集落の生活文化に着目し、住民主体で行政は参加して取り組んだ「村丸ごと生活博物館」、そして、一軒の農家で生きる家族の力を開いた「食の生活文化祭」の取り組みの、三つの事例の中から、地域の資産を再発見することから始まった動きを紹介する。

みんなで取り組んだ住民協働の
水俣病問題の解決と共存、
水俣の再生

熊本県の南、水俣川流域の町水俣に水俣病事件が発生したのは一九五六年のことである。

水俣病認定患者二六五人、一九九五年の政府の最終解決策による救済者一万三三三人。二〇〇四年の最高裁判決による救済三七人。水俣病は多くの生命と健康を奪っただけでなく、地域社会にも深刻な影響を与えた。市民の感情は野放し状態になり、患者は誹謗、中傷、差別にさらされ、市民も就職や結婚で差別を受け、農産物も水俣の名前では売れず、観光客も激減した。さらに、これらの問題の解決があまりにも長引いたため、多くの市民は無力感を漂わせていた。

だが、そんな閉塞した状況を打ち破るきっかけは、意外なところからやってきた。水俣湾の環境復元事業で五八ヘクタールもの土地が姿を現すにつれ、市民が水俣再生の夢を描き始めたのである。すでに患者の公式発見から三〇年を越す長い年月が経過していた。しかし、水俣病問題の解決なくして水俣再生はありえないことから、一九九一年、熊本県と水俣市は、それまでの政策を転換し、水俣病の犠牲を無駄にしないよう、水、こみ、食、物にどこよりも気を付ける環境都市水俣づくりを住民協働ではじめていった。

それから十年、「環境創造みなまた推進事業」と呼ばれた取り組みは実を結び、水俣は「環境都市」に生まれ変わり、市民は胸を張って水俣出身といえるようになってきた。その取り組みは国内外の注目を集め、多くの視察者が水俣を訪れてくるようになり、市民は誇りを取り戻した。「奇跡のよつだ」と市民は語る。「いい世の中になつた」と患者も語る。

吉田文和北大教授は、調べて驚いたと伝えてきた。「旧東ドイツの公害都市の復興と水俣再生の取り組みを比較した。旧東ドイツの化学工業によるヨロバ最大の汚染地帯であるリッターフェルト、ハレ周辺の環境再生と経済再生はEUとドイツ連邦政府による巨額の資金を投入した汚染浄化事業が行われているにもかかわらず、旧社会主義体制下における民主主義の欠如と、旧体制崩壊後に「一流市民」とさげすまれ、誇りを失ったために、市民参加と地域再生への取り組みはほとんどない。そのため、いまだ人口流出と高失業率が続き、ネオナチ誕生の社会的温床となっている。しかし水俣は人の関係を修復する『もやし直し』があり、そうならなかった。同じ公害都市からの再生とは、いっても結果は全然違う」。

水俣の足取りは五つの段階を踏んでいる。そ



自分たちで決めた場所、時間で資源ごみを分別する(21種類)

の第一段階は、水俣病問題の解決と共存である。一九九一年に「環境・創造・水俣実行委員会」が組織され、一九九三年、住民参加による「水俣病問題の早期解決と水俣の再生振興を推進する市民の会」が活動し、十七に分かれていた患者団体が同じテーブルにつき、話し合うようになった。一九九五年、努力は実り患者にとっては苦渋の選択ではあったが、政府案による最終解決にこぎつけた。

第二段階はのちに「もやし直し」と呼ばれる動きである。「荒んだ気持ちのままでは水俣再生はおぼつかない」ので壊れてしまった人の関係を修復する取り組みである。

第三段階は、環境都市づくりビジョンの提示である。一九九二年、水俣市議会による「環境・健康・福祉を大切にすまちづくり宣言」議決、水俣市の「環境モデル都市づくり」宣言により、水俣はそれまでの市政の方向を「環境」に大きく転換し、「環境・健康・福祉を大切にす産業文化都市」を目指すこととなった。

第四段階は行動である。一九九一年、住民の自治的組織「寄る会みなまた」による「地域資源マップ」と水のゆくえを調べた「水の経路図」の作成に始まり、一九九二年、水俣病犠牲者慰霊式の開催。一九九三年、水俣病を語る市民講座(今は「語り部」)の開催、住民参加による資源ごみの分別開始などが展開された。

第五段階は産業振興である。多くの人が環境都市づくりの視察で水俣にやってくる。修学旅行も多い。二〇〇〇年二月には、環境省と経済産業省による「エコタウン」の認定を受け、循環型企

業であるビヤ家電のリサイクル工場など七社が立地し、二二〇名の人たちが働くようになった。取り組み始めて十年、水俣は元氣になり、誇りと自信を取り戻した。二〇〇〇年五月、水俣で全国から市町村長をはじめ産官学の集まる環境自治体会議が開かれ、水俣の取り組みが紹介され、環境都市水俣づくりが評価された。

網元で水俣病患者の杉本栄子さんは語る。「水俣は元氣です。そう伝えてください」「いじめ返しはするな。木と水を大事にして人を好きになれ、そうでないと網元にはなれんと教えたいの。いつを守るのは難しかったけど、人様は変えられないから自分が変わるとやってきました」。

水俣も患者に学び、就職や結婚、農産物の販売などで世間に嫌な目にあっただけど、世間は変えられないから、水俣自らが変わったのである。

住民主体で

行政は参加して取り組んだ
「村丸ごと生活博物館」の取り組み

水俣の最源流に、四十世帯の頭石集落(かづめし)がある。以前は親戚しか行かなかったところだけど、この二年半で一千人の人たちが訪れるようになった。水俣で一番ホットなところになった。そのわけは、二〇〇二年八月五日に水俣独自の仕組みの「村丸ごと生活博物館」になって活動を開始したからである。

八名の生活学芸員がいて、自分たちの暮らし

を案内し、そして山菜取りや野菜づくりなどに
いそむ一五名の生活職人がいる。資格に必要
なことは、「ここには何もないと知らない」ことだ
ある。「これまで住んでいる多くの人たちは、全
国に突出してあるのを、ある」と思った。「そ
ういう素晴らしいものはない。だからここには何
もない」といつのである。私は言い返した。「そ
んなはずはない、生活があるじゃないですか、み
んなでここにちゃんと暮らしていることって本当
はすごいことなんです。よ、地元にあるものを見
て探して磨いて、元氣よくやっていますよ」。
生活学芸員と生活職人たちは、「ここには何
もない」と思わないように研修を受ける。研修
では自分の家、家まわり、集落のことなど自分
たちの暮らしを調べていく。地域にあるものを
探して確認していく地元学の実践である。ある
ものを写真にとって、「この草木は何と呼んでい
るの?」「何に使う?」など、外の人たちがすべ
てに驚いて質問して頭石集落にある暮らしの力
を引き出していく。

撮った写真を並べて絵地図づくりに入ると、
「ここはどこだろう?」「地元の人たちは写真
を食い入るように見つめている。いつも見ている
はずなのに場所がよくわからないのである。写
真を撮ると、それまで見過ごしていた足元のさ
さいなことに目がいくようになっていく。ないも
のではなく足元にあるものに気づくまなざしが
開発されていく。そして尋ねることで見えなかつ
た村の力が引き出されていく。

絵地図ができあがってきた。「森の番長」と題
された山仕事歴四十年の勝目辰夫さんの世界、

無農薬の野菜をつくっている森下寛さん、地蜂
を庭先で飼っている小島利春さん、煮しめ料理
が「ここはひと味違う」と評判になった村の女の
たち、など、頭石の暮らしの底力が立ち現れて
きた。そして今、この絵地図を使って、訪れてく
る人たちに生活学芸員たちは笑顔で説明する
ようになった。

村人たちは、生活博物館になって人を案内す
るようになったら山を見る目が変わってきた。山
に行くとき食べ物がいっぱいあると気づくようにな
った。外から来た人たちが「このすばらしさを教
えてくれるのいい。草取りしたりして村が化粧
するようになった。トーフくりセツトや荷造り
ひもをつくった買い物かごが売れるようになった。
二千元で案内と食事を楽しんでもらい、一割は
村に返している。それがもう三十万円近くな
た。何よりも村が元氣になった」と
いっ。いい話だった。

頭石集落に住む人たちが足
元に目を向けはじめた。速く
に幸せがあると思ってきたこ
れまでを振り返り、ここに生
きる、ここで生きるために、住
んでいるここに目を向けはじ
めたのである。

館長の役目を果たしている
のは人望の厚い農業委員の勝
目豊さんである。笑顔で村人
たちを説得し生活博物館の
動きを軌道にのせた。市は住
民の自主的な動きを支えるこ



生活職人手作りの家庭料理は訪れた人たちに大人気



「これはシカクダケ」と案内する生活学芸員の小島利春さん

とに徹している。住民参加でなく住民が主役の取り組みである。行政は頭石地区の持っている力、住んでいる人たちの力を引き出す役割に徹している。行政参加である。

一軒の農家で生きる家族の力を開いた食の生活文化祭

二〇〇四年の秋、「水俣の秋を食べる」行事で、三十名ほどの人たちが、お茶農家に食べに行った。食べ物づくりに腕をふるったのは二十九歳の天野浩くんである。「自分ちの畑と隣のおじさんおばさんの畑、それと近くの山と川と相談してつくった三六種類もできてびっくりした。野菜ものは俺、パンとお菓子とおやつは妹の美咲、山と川からとってきたものは親父がつくった」といふ。家族料理である。

「白あんのお茶おはぎは、家族は誰も食べていない、お客もみんなは食べていない、食べたかたなま」と笑わせてくれた。絶品は里芋の「ロイヤル」である。浩くんがづくり、ほかの家にも広がった。白あんのお茶おはぎを食べにくるお店の人も出てきた。

「天野君の家では、家のまわりにある素材を使って食べる当たり前の暮らしがある。家族でつくる食の世界がある。昔ながらの料理に加え、あるもので工夫して食べる新しい取り組みがある。足元を調べてきた成果である。」隣のおじちゃんおばあちゃんの野菜づくりの知恵は

すごい」と学んだ取り組みが基本にある。

そして、天野親子がつくる無農薬の国産紅茶は、質量ともに日本でトップとなり、イタリアのミラノで開かれたスローフード世界大会には日本の生産者代表の一人として参加した。今

是水俣芦北スローフード協会の会長になっている。製茶工場の一角に囲炉裏が切られている。そんな天野一家を訪ねて全国から人がやってくる。バイオ・リージョナル運動を展開するアメリカのピーターバークさんもやってきた。

足元の歩く範囲に暮らす人たち、近くにあるものをいかし、住民たちがいっしょに暮らす地域力と人の力が地域を豊かにしているのである。

これから

住民協働と集落の生活文化、家族の力をいかけた三つの取り組みを紹介した。そこには、あ



自分と隣の畑、近くの山と川と相談してつくった26種類の家庭料理

絆、地域固有の風土に生き、時の検証を経てきた生活文化の厚み、家族の力がある。互いの違いを認め合い、距離を近づけ、話し合い、対立のエネルギーを創造のエネルギーに転換した動きがあった。マイナスでもあるものはあると認めて磨くことで誇りと自信を取り戻した人の営みがあった。地域の資産とはみんな生きる力であり、どこにでも当たり前にあるものであろう。だとすれば、問われるのはその地域の資産を発見する私たちのまなざしではないか。

CEL

() (もやい直し) : もやいは、筋い、催合、筋いは船を網で港や船につなぐこと。催合は共同してことにあたること。もやい直しとは人と人をつなぐもの、人と人との絆をもういこと結び直すこととする。)

◎吉本 哲郎(よしもとてつろう)

地元学ネットワーク主宰、地元学協会事務局長。一九四八年水俣市生まれ。宮崎大学農学部卒業。七一年から水俣市役所勤務。九一年に企画課・環境課で水俣病問題の解決と水俣再生に取り組み、その経験を地元学に学ぶ地元学として全国に展開し、現在に至る。著書は、『私の地元学』(NECクリエイティブ)、また論稿として、「風に聞け、土に着け、風と土の地元学」、「地域から変わる日本 地元学とは何か」増刊 現代農業」など。